

翻訳を通してベネディクトの思考をたどる

菊 地 敦 子

翻訳者の仕事は俳優の仕事と似ているところがあるかもしれない。俳優は役になりきるために役に合わせて表情や仕草を変え、喋り方を変えたりするのだと思う。翻訳者はそういうことはしなくても、原文を書いた人間の頭に入り込もうとして、その人と同じような思考回路を得ようとする。そうしないと翻訳はできないのである。

通訳でもやはり話し手の考えをたどり、言葉の裏にある意図を探りながら訳していくのだが、話し手を目の前にして通訳する時は、話し手が何に力を込めて話しているか、どのような表情、どのような口調で話しているかなどのヒントがある。しかし、翻訳では、文字は何の表情も口調も見せてくれない。言葉だけから著者の考えを汲み取っていかなければならない。そうすると、著者が選んだ単語だけでなく、文の組み立て方、文章全体の構成、また著者が何を書いているかまでもヒントにしながら著者の頭の中を探ることになる。著者の考え方を理解したからと言って、著者が書いていることを翻訳者が加える訳ではないが、著者がどのような考えで言葉を選んでいるのか、どんな意図をもって書いているのかを知ることによって、チャット GPT の訳には現れない微妙な違いが出てくるのではないかと感じる。

長年、文化人類学者で『菊と刀』の著者であるルース・ベネディクトの論文、書簡、日記の翻訳に携わってきた私は、彼女の思考をずっとたどってきたような気がする。この「著者の思考をたどる」というプロセスは学術論文、書簡、日記などの翻訳において特に重要である。物語の翻訳をする場合、話の展開、物語の中の状況把握、登場人物の描写を思い浮かべながら、物語をたどって行くことになるが、論文、書簡、日記の翻訳はそれとは違う。ベネディクトの論文を訳している時、私は学者としての彼女のスタンスを探り、書簡を訳している時は彼女が相手との人間関係をどのように構築しようとしているのかを探り、日記を訳している時は一人の人間として、あるいは一人の女性として彼女がどんな生き方をしようとしていたのかを探った。それは、ある意味、同じ学者として、あるいは同じ女性として、自分を彼女と重ね合わせながらやってきた作業だと言える。

翻訳を始めた当初はベネディクトのことを全くと言っていいほど知らなかった。『菊と刀』の著者であることは知っていたが、私の専門は言語学なので、どちらかというとベネディクトと交流があったフランツ・ボアズやエドワード・サピアの方をよく知っていた。サピアやボアズの論文の書き方と比べるとベネディクトはまどろっこしい書き方をする。一つの文にいくつも

の句や節が挿入されていて、文全体の意味がぼやけている。しかも、アメリカ先住民の部族を特定の部族名で呼ぶこともあれば、もっと大きな括りでその部族が居住する地域で呼ぶこともある。そして、先行文とその後に来る文の内容の関係性は明確に示されていないことが多く、翻訳しながらそれを探っていくといけなく、いわゆる翻訳者泣かせの文章である。その例を一つ挙げよう。これは最初に翻訳したアメリカ先住民に関するベネディクトの論文、*The Vision in Plains Culture* の一節である。ここで vision と呼んでいるのはアメリカ先住民が霊界と繋がるために求める幻視のことである。

物心ついた思春期の男子のみが幻視を追求するという周りの部族と違って、平原地域では、成人の男性が幻視を追求する。このことを述べた後に次の文が続く。

According to the myths and recorded experiences, this generalization holds good for all the Western Plains, north and south. At the east, especially among the Assiniboiné, the Hidatsa, and the Omaha, the puberty convention of the Woodlands is known and practiced in varying degrees; but it is always in addition to the characteristic Plains maturity fast. That is, we find even among the Omaha, who most definitely link the securing of a guardian spirit with puberty, that the vision is sought also for all kinds of recurring experiences throughout maturity, as it is all over the Plains, and is not in the Eastern Woodlands.

(*Anthropologist at Work*, 1959:19)

まず、この部分を理解するには、基本的なところで、アメリカ先住民が住んでいた6つの地域を示した以下の地図が頭になくてはいけなく。



(Byce Reilly's slide "Native Americans lived in six different regions" からの地図
<https://slideplayer.com/slide/2291156/>, 2024年11月1日アクセス)

この地図でわかるように Woodlands 地域というのは Plains、つまり、平原地域の東側にある。さらに知らなくてはいけなくことは、Assiniboiné 族、Hidatsa 族、Omaha 族が平原地域の東

部に住んでいた部族だということである。つまり、Assiniboine 族、Hidatsa 族、Omaha 族のことを言っている時は、Plains 地域の先住民の話をしているのである。ベネディクトは先住民の話をする際、時にはそれぞれの部族名を使い、時にはそれらの部族が住んでいた地域名を使うのでややこしい。上の文章の最初の部分を訳すと次のようになる。少しわかりやすくするために下線の箇所を加えた。最初の文で言及されている「考え」とは、平原地域では、成人の男性が幻視を求めるという説のことである。

神話や経験を記した記録を見ると、この考えは平原地域西部の北から南までの地域には当てはまると言える。平原地域の東部、特にアシニボイン族、ヒダツァ族、オマハ族の間では、隣接するウッドランド地域で行われる思春期の儀式がさまざまな形で知られ、実践されている。しかし、それは常に平原地域特有の成人男性の断食に加えて行われるのである。

（『文化人類学者の仕事（仮題）』2025 年出版予定）

「成人男性の断食」の箇所に線を引いたのは、原文が maturity fast（成人断食）で、これもまたわかりにくいフレーズだからである。この箇所では成人の男性が幻視を求めるか、思春期の男子が成人の儀式の一部として幻視を求めるか地域によって異なるという話をしているのだから、maturity fast という言い方は非常に曖昧である。前の段落を読むと平原地域の儀式として、成人の男性が断食をすると書いてあるので、ここは「成人男性の断食」とした。

前半のややこしさにさらに輪をかけたのが後半にある、一つの文にいくつも挿入節を入れて情報がパンパンに詰め込まれた書き方である。上の文の That is 以降にベネディクトが主張したいことが書かれているのだが、思いが先走ってか、一つの文にいくつものことを詰め込み過ぎて何が言いたいのかははっきりしない。最初に彼女のこのような文に出くわした時、なんて文が下手な人なのだと思った。もっと簡潔にわかりやすく説明できないのかとイライラしたものだった。上の文の That is 以下をチャット GPT に訳させると次のようになる。

つまり、思春期と守護霊の獲得を確実に結びつけているオマハ族においてさえ、平原地帯全体で見られるように、成人期を通してさまざまな出来事においても幻視が求められるが、東部の森林地帯ではそうではない。

（ChatGPT-4, 2024 年 11 月 2 日アクセス）

訳は正しいのだが、読者は何が言われているか理解できるだろうか。翻訳とは、ただ一つの言語を別な言語に置き換えることではない。原作者が書いていることが読者に理解されなければ翻訳にならない。

上の文章の前半部分では、平原地域に居住するオマハ族が隣接するウッドランド地域の影響

で、幻視獲得を思春期の男子と結びつけるということが述べられていたのだが、後半の文章では、幻視の獲得を *securing of a guardian spirit* 「守護霊の確保」に置き換えている。ここでもベネディクトは読者を混乱させるような書き方をしている。「守護霊の確保」が「幻視を得る」と同じだということを知るには、前の段落に戻らないといけない。そこでは、幻視を得ることは守護霊を得ることだと述べている。

次に、オマハ族は、幻視を得ることを思春期の男子と結びつけているだけではなく、成人男性の断食とも結びついていることを述べている。つまり、オマハ族にとって幻視を求めることは、思春期に始まって、成人期を通して様々な経験において行われるのである。ウッドランド地域ではそういうことはなく、幻視を求めるのは、思春期の男子に限られている。そして、*even among the Omaha* の *even* でベネディクトが強調したいのは何なのだろうと考える。チャット GPT の訳ではこれがはっきりしない。どちらかという、この訳の中では、オマハ族がいに平原地帯の他の部族と共通しているかということが強調されているかのように思える。実は英語でもなぜここに *even* が入っているのかははっきりしない。論文を読み進めていかないとその回答は出ない。

上の文で平原地域西部と平原地域東部の違い、そしてウッドランド地域とオマハ族の違いを指摘した後、数ページにわたってベネディクトは事細かく、どの部族が幻視をどのように扱っているかを一つ一つ取り上げ、部族によって、幻視を確保する目的が違うことを述べている。それは守護霊を得るためだけでなく、あるいは成人になるためだけでなく、儀式を執り行う権限を得るためだったり、地位を得るためだったりする。また、幻視を得る方法も、自虐、断食などと様々なパターンがある。幻視を求める時期も成人期、思春期だけでなく、戦いの前であったり、誰かが死んだ時などと部族によって違っている。つまり、一つ一つの部族の習慣を細かく見ていくとどの部分が重なり、どの部分が異なっているのかわかるということだ。

ベネディクトのこの論文は比較的初期の論文で、彼女の文化に対する考え方がまだはっきりと芽生えていない。しかし、後に彼女は、文化とは、一つの集団が持っている考え方や価値観の表れであると提言する。そして、表面に現れる形だけを取り上げてその部族の文化をグループ分けすることに対して彼女は懐疑的であった。確かに平原地域の多くの部族は幻視の確保を成人男性が行った。しかし、東部のオマハ族は、根底にある平原地域の習慣を維持しつつ、隣接する別の部族の影響を受けて幻視を思春期の男子と結びつけることもする。そしてウッドランド地域の部族はまた別のパターンで幻視を求める。つまり、幻視を求めることを成人男性と結びつけるか、思春期の男子と結びつけるか、という単純な分け方はできないということを示すための、最初のとっかかりが上の文なのである。これを踏まえると、*even* を下手に訳すと読者を誤った方向に導いてしまうことになるかもしれない。ここは「さえも」のような強い表現ではなく、「オマハ族も」くらいにしておいた方が後の議論と続けやすくなるのではないかと考える。

つまり、幻視を通して守護霊を得ることを思春期と結びつけるオマハ族も、他の平原インディアンと同じように、成人期の様々な経験において幻視を求めることがわかる。これは東部のウッドランド地域では見られないことである。

（『文化人類学者の仕事（仮題）』2025年出版予定）

ベネディクトが生きた時代背景を考えると、この時代は文化人類学、言語学、社会学、心理学などの分野で構造主義が広まり始めた時代である。レヴィ＝ストロースをはじめ、文化人類学者は一つのテーマを取り上げ、それが複数の文化でどのように実現されているかを調べ、普遍的な文化の構造を追い求めた時代である。その中でベネディクトは、そのような大雑把な括り方では実存するそれぞれの文化の豊かさを見逃してしまうと考えたのではないだろうか。ベネディクトはこの論文を次の文で締め括っている。

Is it not our first task to inquire as carefully as may be in definite areas to what things the religious experience attaches itself, and to estimate their heterogeneity and their indefinite multiplicity?

(*Anthropologist at Work*, 1959:35)

私たちがまずしなければならないことは、特定の宗教的経験がどのような事柄と結びついているかをできるだけ慎重に調査し、その異質性や限らない多様性を察することではないだろうか。

（『文化人類学者の仕事（仮題）』2025年出版予定）

この文の中でベネディクトらしいと思われる表現が2箇所ある。下線部分の *as carefully as may be* と *estimate* という箇所である。ベネディクトは非常に慎重な人だったと思われる。ある人たちをこうだと決めつけることを極力避けた。慎重に慎重に（*as carefully as may be*）その人たちに関する情報を集め、それを上から目線で評価することは決してなく、自分の考えはある種の推測（*estimate*）に過ぎないという言い方をした。それは、もしかしたら、彼女自身がなかなか人にわかってもらえなかったから、そういう考え方に至ったのかもしれない。

ベネディクトは子供の時から疎外感を味わっており、いつも仮面をかぶって、自分を人に明かすことをしなかった。1912年10月のジャーナルに次のように書いている。

My real me was a creature I dared not look upon — it was terrorized by loneliness, frozen by a sense of futility, obsessed by a longing to stop. No one had ever heard of that Me. If they had, they would have thought it an interesting pose. The mask was

tightly adjusted.

(*Anthropologist at Work*, 1959:119)

本当の自分は、自分でも直視することができないような人間だった——孤独に怯え、虚無感に凍え、全てをやめてしまいたいという渴望に取り憑かれていた。誰もそんな「私」を知る者はいなかった。もし知っていたら、それを興味深い見せかけだと思っただろう。仮面は、ずれないようにしっかりと着けられていた。

（『文化人類学者の仕事（仮題）』2025年出版予定）

ベネディクトは自分自身が人に簡単に理解してもらえないと感じていたので、彼女が人を見る時も、表面に現れるものだけでその人を判断できると思わなかったのではないだろうか。彼女自身が「興味深い見せかけ」と思われるかもしれないと感じていたので、自分はそのようなレッテルを簡単につけるようなことはしないでいようと思ったのではないかと思う。このような彼女自身の体験が、ベネディクトの文化人類学者としての姿勢を形成したと言っても過言ではないと思う。彼女自身、アメリカという文化圏にいて、疎外感を味わっていたため、「アメリカ人はこうだ」のような言い方に強く抵抗したに違いない。一つの集団の中にも豊かなバリエーションがあるということを見つけることが、ある意味、彼女自身の存在価値を見つけることになったのではないだろうか。それが異質なものに対するベネディクトの寛大さに繋がり、異質なものに対する差別、あるいは異質なものをなくして全てを均一化しようとする動きに対する抗議へと進んだのだと思う。

ベネディクトの時代は、アメリカ先住民の文化は野蛮だとされ、白人文化に同化させるための政策が取られていた時代である¹⁾。論文の中でベネディクトは、果たして白人文化の方が先住民の文化よりも優越なのかを何度も問うている。

未出版の論文でベネディクトは、次のように書いている。典型的なベネディクトの書き方で、文章だけからベネディクトの考えがはっきり読み取れるわけではない。アメリカ先住民も白人もどちらも威厳と名誉を得るための駆け引きをする。しかし、そのやり方が違う。先住民が歌や幻視や贈答慣行によって名誉を得るのに対し、白人は多くの土地を取得することによって名誉を得ることを述べている。

One played it with songs and visions and the giving of goods for counters; the other played it with land. And if the red man's counters were harmless and dispossessed no one of food or shelter, on the white man's counters have hung progress, and the glories of civilization.

(*Anthropologist at Work*, 1959:43)

この部分のチャット GPT の訳はかなり下手である。コンテキストをわかっていないというだけでなく、私のようにベネディクトの考え方をたどって来ていないので、以下のような意味不明な文になる。

ひとりは歌と幻、物品をカウンターとして用い、もうひとりは土地を用いた。そして、赤い肌の人々のカウンターが無害であり、誰からも食物や住まいを奪わなかったとしても、白い肌の人々のカウンターには進歩と文明の栄光がかかっていた。

（ChatGPT-4, 2024 年 11 月 17 日にアクセス）

ここでは、先住民のやり方と白人のやり方、そしてそれぞれの価値観がいかに違うかをほのめかして訳したい。そして白人がしていることに対して厳しい視線を送るかのようにベネディクトが書いていることを示したい。

一方は歌と幻視、そして贈答品を駒にして名誉を得ていた。もう一方は土地を駒に使った。先住民の駒が無害で人から食べ物や住みかを奪うことはなかったのに対し、白人の駒には進歩、文明の栄光がかかっていた。

（『文化人類学者の仕事（仮題）』2025 年出版予定）

ベネディクトは、白人によって先住民の文化が少しずつ崩壊していくのを目の当たりにして、先住民の文化を詳細に記述することに時間を惜しまなかった。部族の行動の背景にある考え方、価値観を丁寧に探った。

ベネディクトは *Science Illustrated* という雑誌のインタビューで文化人類学をする目的を聞かれた時に次のように答えている（著者不明 1948:24）。

… to make the world safe for differences

… 多様な人々が安全に暮らせる世界を作るためです

アメリカ人でありながら、アメリカの中で生きづらさを感じていたベネディクトは、文化人類学を通して多様な民族に出会い、様々な行動、それにまつわる様々な価値観を発見し、自分のような人間がこの世界にいてもいいのだという安心感を得たのではないだろうか。そして、様々な人々のことを記述することによって、世界は一つの価値観だけで回っているわけではないのだということを人々に知らせ、どの人も尊厳を持って暮らしていけることを望んだのではないかと思う。権力がある人たちの価値観が横行し、それによって異なる価値観が押しつぶさ

れる状況は、今日も続いている。80年ほど前に生きたベネディクトの考え方をたどり、彼女の言葉だけでなく、その考えが正しく伝わるように翻訳できることを願っている。

注

- 1) 先住民の子供たちを白人文化に同化させる寄宿学校政策は1970年代まで続き、これに対する正式謝罪をバイデン大統領が2024年10月に行ったばかりである。

参考文献

- Benedict, R. (1922). The vision in Plains culture. *American Anthropologist*, XXIV, No. 1. pp1-23
- Mead, M. (ed.) (1959). *An Anthropologist at Work: Writings of Ruth Benedict*. Boston: Houghton Mifflin Company
- A lady of culture. (1948). *Science Illustrated* No. 8. p.24-27
- M. ミード（編）（2025年出版予定）『文化人類学者の仕事（仮題）』ミネルヴァ書房。菊地敦子、福井七子訳